読解検定送信フォーム（←国語読解クラスの受講生で、読解検定を受けなかった人は、このフォームから送信してください。）

読解検定長文小５秋11月　講師コード：　　パスワード：　　） 送信

読解マラソン集 5番 本当にしかしこの三人組は nu3

本当にしかしこの三人組はそれからも間断なくいろんなことをやってくれた。近所の養鶏所の病気や体の弱った鶏だけを入れておく囲いをあけ、二十数羽の鶏を道路へそっくり逃げ出させてしまった時は私が仕事で出張中で、妻と健二郎君の母親が必死になって鶏を回収して歩いたらしい。

この時は養鶏所の入り口の囲いを修理しているさなかだったので、まあこれは仕方がありませんよ、といかにも人のいい老経営者が言ってくれたので、それ以上の騒動にはならなかったという話だった。

イタズラは三人のうちの誰が首謀者ということでもなく、三人集まるとごくごく自然にそういう面白い「仕事」を発見してしまうようであった。

そうして彼らがまきおこしてくれた次の一件はサツ マイモ騒動というものであった。（中略）

仕事をすませて帰ってくるともう夕方近くになっていた。私の妻はその日職場の保母の研修会があるとかで、夕食は私がつくる約束になっていた。私鉄駅の近くのマーケットで肉と野菜を買い、ビールが切れているのを思い出して缶ビールも半ダースほど買った。そうして急いで家に帰ってくると、どうしたわけなのか家の門の前にさつま芋が山のように積まれていたのだ。その芋はいずれも土まみれでまさにそっくり全部いましがた掘りおこしてきたばかりです、という状態であった。

「はて、これはどうしたのだろう？」と首をかしげているうちに、例の三人組が裏庭からどんどん飛び出してきた。みるとまたもや三人揃って泥だらけになっている。

「あのね、これね、今日みんなで取ってきたんだ」

と岳が私の前ですこしそりかえり、自慢げに言った。

「三人で力をあわせたんだ」

と、健二郎君がすっかりとは舌の回らないキンキン声で言った。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「これを……どこから？」
そう言ってから、私の頭の中によくない予想がはげしくするどく迫ってきた。そう思ったのと同時にクルリとふり返ると、私の予想がまさしく大命中である、ということがわかった。
すなわちわが家の前の芋畑が見事に掘り返されているのである。
「うひゃ」と私はうめき、その前で泥だらけの三人組はますます得意そうにそりかえった。
「ああ、おまえたち……」
と、私は言った。
それからが大変であった。調べてみると掘り返されたのは三うねそっくりで、それだけでもかなりの分量である。
昇君がわけを話しに家に帰り、健二郎君の母親がまた私の家にやってきた。「ああ、こんなに……」と健二郎の母親は前かけを両手で握りしめいまにも泣きだしてしまいそうな顔をした。足の早い夕暮があたりの薄闇を急速に深めていた。
「どうしましょう……」
と、健二郎の母親はひくい声で言い、私の顔を見つめながらいまにも本当に泣きだしそうにぎゅっと唇を引きしめていた。
「なんとかしましょう。大丈夫ですよ」
と、私は言った。しかしそうはいってもあまり自信はなかった。あやまって先方の農家に引きとってもらうか、あるいはこちらで掘りおこした分を買うかそのどちらかしか方法はないような気がした。具合の悪いことに、その芋畑の主は、このへんでも有名なケチで頑固者という噂だった。そうして畑のなかに子供たちがたびたび入って荒す、と言って何度か私の家などに文句を言いにきていたのでもある。

（椎名誠「岳物語」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

　私はそのまま健二郎君の母親と一緒に犯人の三人組を連れて農家の主人のところに詫びにいくことにした。健二郎君の母親はいったん家に戻ってエプロンをはずし、子供たちのジャンパーを持ち、自分は薄いオレンジのカーディガンを羽織って出てきた。心配で肩をすこしすぼめ、二人の息子の手をひいた若い母親のオレンジ色の背中が外灯の明りのなかでさびしかった。そしてそのときふいに私にはその小さな背中がまったくもって場違いながらもおそろしいほどなまめかしく見えてしまったのでもある。

　その畑の主は、仕事のあとの早い風呂に入ったばかりで額や頬のあたりを気分よくほてらせていた。手拭いでごま塩の頭をごしごしとかきながら、

「そりやあなあ……」

　と喉の奥でかすれるような太くてひくい声で言った。「そりやあなああんた、作物というものはこしらえているものにしかわからねえものですからね……」と、その老人はなんだか判じもののようなことをゆっくりした口調で言った。

「本当に申しわけありませんでした……」

　と健二郎君の母親は相手が言い切らないうちに深々と頭を下げ、それから嗚咽するように頭を下げたままくっくっと肩のあたりをふるわせていた。

　それを見ながら私はすこしいらだってきていた。いくら大変なイタズラだといっても、なにも自分たちの息子がその畑を二度と使えなくしてしまうようなとてつもない大打撃を与えてしまったわけではないのだ。その気になるなら相手の言う値でそっくりこちらが芋を買い取ってしまえばそれはそれでとりあえず話は済むことではないか、何もそこまで、決定的に卑屈になり、ひれ伏すこともないじゃあないですか、と、その時私はよっぽど大きな声でそんなことを言ってしまおうかと思ったのである。

「まあしかし……」

　と、農家の主は太くてひくいしわがれた声を出した。「まあしかしね、これでまあそちらさんのほうでもすこしはわかってくれるんならいいんですよ……」と、そのごま塩頭は言った。そして結局掘りだした芋の半分を先方が引き取り、残りの芋を、私たちが買い取る、ということで話はまとまった。

　空腹なのと寒いのと、それからどうも自分たちのしたことがあまりいいことでもなかったようだということがよくわかってきたのか、帰りの道は珍しく三人とも神妙に黙りこみがちであった。

　健二郎君の家の前にきたとき、私は思い切って「この芋は全部うちで買いますからそちらは結構ですよ。ただしあれだけの量はちょっと食べきれませんのでお芋の方は半分ぐらいは食べてくれませんか」と言った。

「そんな……」

　と、健二郎君の母親は娘のように眼を丸くして言った。

「いやいいんです」

「でも、そんなことはできません。やっぱりこれは……」

「いや本当にいいんです。とにかく今度のことはこちらの気の済むようにさせて下さい。それに今日はもう遅いから……子供たちもおなかがへってますし……」私は必死になって私の提案を押し通した。母子家庭の、おそらくきっともう何年も続いているのだろうそのつましい生活に対してすこしでも力になれれば、という気負いが私の中にあった。

（椎名誠「岳物語」）

読解マラソン集 7番 夜中、仕事をしていたら、 nu3

夜中、仕事をしていたら、背後から空を切る音がした。右耳をかすめて、小さな影が部屋の中を羽音をたててまわった。一瞬驚いた。蜂に見えた。シャーッと乾いた音をたてて一周し、手元の机の角に下りてとまった。

蝉である。

東京の真ん中に近い、西麻布の小さなアパートに、しかも夜中の三時を過ぎて入って来た。

私の部屋には窓がひとつしかない。その窓を背に私は仕事をする。夏場は暑いので、夜風が吹く時分に窓を開けっ放しにして座る。窓のすぐ側に少し大振りの樫の木が伸びている。たぶん蝉はこの樫の木で昼間過ごしていたのだろう。

小さな虫は時々やってくる。しかし蝉は初めてである。

蝉はじっと動かないでいる。うるし塗りのように黒いつやのある頭部と、こぶのように盛り上がった胴部が、よろいのようで勇ましい。羽は見事な曲線でふち取られ、すき通った羽膜に何本もの黒い細い線が、地図でよく見る河の支流のように流れている。なんと精巧にできているのか。

小さい頃何度も蝉を捕りに行っていたのに、その時はこんなことに気付かなかった。

今年の夏は、ほとんど外国に出かけていて、弟の命日に気付いたのはタヒチの島で、しかも夜だった。供養に何も送ることができず、帰れないとの電話も入れられなかった。ひどく情けなかった。

私の弟は十六歳の時に海で遭難して死んだ。私が二十歳の夏だった。弟が死んでからしばらくして、私の町で、弟は自殺だった、といううわさが広がった。弟の性格を知っていた私は、世間はばかな話をするものだと気にもとめなかった。

ところがある夜、私はお手伝いの小夜から、弟に関して思ってもみなかったことを聞いた。

それは弟が、小夜と二人で春先から何度も近くの川へ樽や筏を運んで、川下りの練習をしていた、という話だった。

私は弟の意外な面を耳にしてとまどった。弟はどちらかというとおくびょうな性格であった。幼い頃、二人で道を歩いていて放し飼いの犬にでくわすと、そっと後ろから私の上着を引っ張るようなところがあった。

小夜の話と自殺のうわさ話が気になって、その夜、私は弟のことをいろいろと考えてみた。私は弟のことを他人よりよく知っていると勝手に思い込んでいた。だが、それは兄としての私の思い過ごしで、弟の性格や、考えていたことは、本当はまるでわかっていなかったのではないか……。

私が最後に弟に会ったのは、彼が遭難した年の正月で、大学の野球部を退部した私に、父は大学をやめてすぐに家業を手伝うか、将来役立つ勉強をしろと命じた。それは文学部から他の学部に転部しろということだった。私はそうしたくないと返答した。つかみ合いに近いもめ事になった。父に逆らうことなど我が家では考えられないことだった。私は飛び出すように家を出て、東京へ向かった。しばらくして、弟が家を継ぐという話し合いがついたと知った。

（伊集院静「夜半の蝉」）

初七日の終わった夜、私はふとんを抜け出し、母屋を出て離れにある弟の部屋に行った。電灯の紐をさがしていると高校生特有の、運動部の選手独特の汗のしみた匂いが漂った。

あかりをつけると、そこには受験勉強の最中だった弟の時間が停止したまま浮かび上がっていた。私は弟の机を掌で触れた。ひんやりとした木目の感触から、つい十数日前まで、ここで笑ったり、うたを歌ったり、悩んだりしていただろう若いゴツゴツした弟の気持ちのようなものが感じられた。

部屋を見回した。かつて私も使っていた本棚があった。『樽にのって二万キロ』『コンチキ号漂流記』『冒険者×××』、そんな本が並んでいた。小夜の話は本当であった。

してはならないと思ったが、私は弟の引き出しを開けてみた。大学ノートが一冊あった。それは弟が高校に入学してからの日誌で、毎日ではないが日々のこと、サッカーの練習、小遣いの出納も記してある雑記帳のようなものだった。真面目な弟の性格がよくあらわれていた。

二月のある日、そのページだけが文字がていねいに書いてあった。その日は弟の誕生日である。私が父と争って出ていった翌月だった。

要約すると、――兄が父と争って家にもどらないことになった。母に相談し父に命じられて、自分はこの家を継ぐことにした。医者になる。父は病院をたてると言った。だが自分はシュバイツァーのような医者になりたい。アフリカに行きたい。しかし親孝行が終わるまでがんばって、それからアフリカに行き冒険家になりたい。その時自分は四十歳だろうか、五十歳だろうか……。それでも自分はそれを実現するために、体を鍛えておくのだ。私は兄にずっとついてきた。兄が好きだ……――

弟はその冬、北海道大学の医学部志望を担任に提出したという。

私は自分の身勝手さ、いいかげんさを思った。済まないと思った。長男である私のわがままが、弟を泣かせ、孤独にしていた。

あの夏の午後、川向こうの屋敷町に私は弟と二人で蝉を捕りに行った。私達の町と違ってそこは塀の上にまで大きな木々が茂り、蝉は捕り放題にいる。たちまち弟の持つかごは蝉で一杯になった。

帰ろうとした時、屋敷町の子供達に囲まれた。蝉を置いて行けといわれた。四、五人の相手は身体も大きかった。弟は背後で私の上着を握りしめていた。私はだまっていた。すると背中で急に弟が大声で泣き出した。子供達は笑った。そして弟の持っていたかごから蝉をわしづかみにして、何匹かを道に投げつけた……。

家に帰ってから、私は弟をなじった。二度とおまえをどこにも連れて行かない、と言った。そういわれても弟は私のそばを離れないで、しゃくりあげながら私を見ていた。そんな弟によけい腹が立った私は、弟をなぐりつけた。弟はあやまりながら私を見つめていた。

ふとした時に、あの夏の日の弟の目を思い出し、日誌の文字が浮かぶ。あの少年達に立ち向かうこともしなかったひきょうな自分を思う。あやまることのできない自分が生きている。

蝉は壁にじっとしている。窓を開けたまま、私は電灯を消した。どこか他人とは思えぬ一匹と、自分を情けないと思っている一人が暗闇の中にいる。

もう秋がそこまで来ている。

（伊集院静「夜半の蝉」）